

## キリストに迎えられる家

牧師 山本 護

「教会も柿吊るしおり田舎では」。礼拝堂横の集会所、その軒先に吊られた柿の一つひとつが山野の秋色を濃縮して光を放っています。北風の中、何の推敲もなしにふと口をついて出た一句。とはいえ、これは虚構で、いささか願望が投影された光景かもしれません。田舎の「教会も」と詠むからには、どの家々の軒にも柿が吊るされていて、集落の外れで遠慮がちに佇む教会でも柿が吊られている。じっと目を凝らせば、牧師家族の慎ましい暮らしまでも見えて来る静謐な待降節です。



今日では、田畑はあっても兼業で忙しく、柿を吊るしている家は見当たりません。新参者の教会だけが、昔の習わしに従って柿を吊るし、臼と杵で餅を搗き、森の木を燃料にしています。「教会も柿吊るしおり田舎では」。この句は正直な写生ではなく、失われてゆく伝統への惜別なのかもしれません。私自身は町場育ちでこんなフォークロアなど知らないのに、どうも未来志向と言うより過去志向。八ヶ岳教会で使っている讃美歌は「21」ではなく文語調の1954年版だし、御言葉を味わう聖句は大正時代の文語訳です。

「なんじら心を騒がすな、神を信じ、また我を信ぜよ。わが父の家には住處おほし、然らずば我かねて汝らに告げしならん。われ汝らのために處を備へに往く。もし往きて汝らの爲に處を備へば、復きたりて汝らを我がもとに迎へん、わが居るところに汝らも居らん爲なり(ヨハネ傳福音書 14 章 1~3 節)。

これはイエスの、弟子たちへの告別の言葉。父なる神の家には私たちキリスト者の「住む所がたくさんある」と言い、「もしまだ無くても、自分が先に行つてそれを用意し、戻つて来てお前さんたちを迎えよう」と約束されました。父なる神の家に迎え入れられるのは私たちの死後のことか、それとも「終りの日」のことでしょうか。生きて終りの日を待ち続けることは辛いでしょうが、死にながら待っているのならそうでもないか。

それにしても、父なる神の家とはどんな造りなのでしょう。豪華な神殿だったらまっぴら御免ですが、私が想像する父の家は田舎の小さな教会。ここにキリストがおられ、その時が来れば奥に続く村落の、柿を吊るした粗末で清潔な一軒に案内してほしい。「わが居るところに汝らも居らん爲なり」といっても、四六時中顔を突き合わせているより適度な距離で共にいて下さる方が心地よい。でも今は「われらが居るところに汝を迎へる」降誕の季節。まずは柿吊されたこの八ヶ岳教会に幼子イエスをお迎えしましょう。Ω